生存科学研究ニュース

VOL. 11. NO. 1　　1996. 1. 10 発行

発行　財団法人　生存科学研究所

〒104　東京都中央区銀座4－5－1
電話 03-3563-3518

第2回「生存の理法」研究会
精神鑑定をめぐって

平成7年12月5日(火)午後2時より生存科学研究所において表記の研究会が開催され、慶應大学名誉教授・保崎秀夫氏から「精神鑑定をめぐって」と題して発表があり、引き続いて討議が行われた。保崎氏は精神科医として精神鑑定に深い経験をお持ちで、特に精神現象学を研究されており、また武見先生が日本医師会会長当時開催された特別医学分科会「ライフサイエンス学会」でも武見先生に請われて講演されている。

保崎氏は、精神鑑定と鬱病または鬱状態をめぐってその判断の困難さなど4つの話題を提供した。

(1)夫の転職、借金の積み重ね等経済的困窮状態の中で、何回も自殺未遂を繰り返し、遂に刃物で3人の子供を次々と殺害し、自らも自殺を図った47才の女子の症例について。

彼女はこの犯行について、お金は借りても返せば良い、何とかなる、子供は自分の肉体の一部だから、自分の思うようにしてもよい等と特異な主張をしている。この例は、起訴前の鑑定では鬱状態ではない、責任能力ありとされたが、その後の鑑定で反応性鬱状態、性格にも問題ありと判定された。

(2)鬱状態、鬱病の判定の困難性について。

鬱状態、鬱病は案外理解してもらえない。鑑定に際してもしばしば問題となる。その行動に理解出来ないものは無く、原因があれば当然と思える行動をとり、おかしな行動はしない。内因性、反応性、心因性等と分類されるが、本当はどう区別すれば良いのか。全身状態が悪ければ憂鬱になる等身体的背景のあるケースも少なく無い。アルコールやインターフェロン等の影響のあることもある。心中の失敗例の鑑定では自殺、他殺の判定に関わる。死にたいといった場合、鬱病なら治療することになる。

(3)オランダの遺体埋葬法、安楽死の問題について。

オランダでは自殺幇助、嘱託殺人も一定の場合には起訴を免れるか起訴されても軽い刑罰か無罪となる。安楽死を行った後で、医師がアンケートに従って所定の書類に記載して検死官に報告、検察官に回り、問題が無ければ埋葬許可書が出され、問題があれば高裁の検事が討議して起訴、不起訴を決める。精神的苦悩のみによる要請で精神

科医が自殺幇助を行ったという最近の問題がある。鬱があれば安楽死は認められない（治療する）というのがこれまでの考え方である。生きがいが無いというだけで自殺幇助が出来るのであろうか？

(4) ナチスドイツで民族問題としての迫害以前に、精神科医が精神鑑定により患者を収容所に送っていたということについて。

発表の後、色々な分野、色々な立場からの質問、意見が出され活発な討議が行われた（詳細は雑誌『生存科学』に掲載予定)。

第4回「生存科学基礎論」研究会
先端科学技術と社会思想

12月14日 (木) 午後3時半より、生存科学研究所において表記の研究会が開催され、八千代国際大学学長高瀬淨氏より「先端科学技術と社会思想―物質・生命・人間―」と題して発表が行われた。

高瀬氏は、冷戦後の世界はぎくしゃくはしても平和の基調に向かうであろう、そうなれば先端科学技術、それも生命科学に向かうであろう、先端科学技術に導かれる豊富な社会では内面的人間疎外が問題になると予測してこのテーマを選んだ、と前置きした後、以下のように、それと生存の研究との関わりを説明し、次いで現代世界への視点として「文明・文化問題」に論及した。

自分が専門とするジャンルから、生存科学を生存の理論の社会的アプローチと考えるが、その政策論的実践課題は（1）経済と貧困（絶対的貧困・・・60億の世界人口中10億の生存に関わる絶対的貧困者の存在）、(2) 人間の尊厳問題（新しい貧困・・・人間疎外の問題）、(3) 生と死の問題（現代に生きる・・・生と死をパッケージとしてみる）の3つである。これらの公共的政策には制度化、啓蒙、義務が必要となるであろう。その際一番突き当たるのが科学の視座である。科学には、科学のための科学と役に立つ科学とがあるが、その両者を接近させるために人間のための科学が必要である。現代のような歴史的過渡期の状況のもとでは一つの普遍的な公理体系から理論的に演繹されるものはないのではないか。現実に生きる人間の苦悩・葛藤から引き出されるのが現代の思想であり、そこに社会科学の課題がある。それを科学技術のシステムの中で捉える必要がある。

「文化・文明問題」としては、ソ連型社会主義の崩壊、現代資本主義の混迷、ポスト植民地時代の終焉の中で、多系的発展段階にあり、近代西欧にこだわり過ぎているのではないか。多文化主義が必要であり、共生が求められている。世界的に、イデオロギーとエコノミーとテクノロジーの整合性が欠如している。文明構造の変容を模索中であり、一国の問題でなく、人類生存の危機である。

最後に高瀬氏は、転換期にある現代は、情報革命と知識社会に向かっている、情報のタームを経済原論に入れる必要がある、情報とエネルギーはまさしく生命代謝過程であると述べたうえで、環境倫理、生命倫理、医療倫理にも言及した。

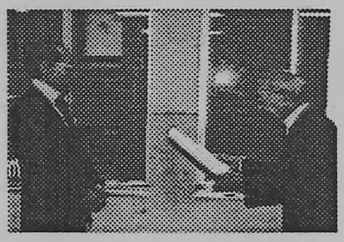
発表後の討議では、「環境倫理と生命倫理とをアウフヘーベンしたものがまさに武見思想におけ

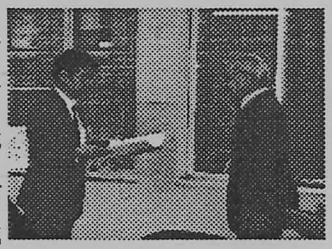
る「生存科学」であるという指摘や、環境・資源が悪化すればナショナリズムが強くなる可能性があり、これは倫理では解決できないという問題提起があり、活発な議論が時間一杯続いた（詳細は雑誌『生存科学』に掲載予定)。

武見賞授賞式

12月16日 (土) 午後２時より、生存科学研究所において、公益信託武見記念生存科学研究基金運営委員会板垣委員長他関係者出席のもとに平成７年度武見賞の授賞式が行われた。今回は武見記念賞受賞者はなく、武見奨励賞が、ニュース前号でも紹介したように卜部文麿氏と真柳誠氏の２名に授与された。

受賞者の紹介は前号に譲るが、今回の授賞式における両氏の挨拶では、卜部氏が、阪神大震災での被災とその後の被災地域における被災者の精神的状況およびそれに対して氏の行った活動などを紹介し、真柳氏は中国の本国では既に失われてしまっている貴重な文献が日本に保存されていたり、日本の江戸時代の漢方研究の資料が高く評価されて台湾に保存されていることを発見したことなど有意義なお話が聞かれ、また陪席した推薦者、財団・基金関係者からもそれぞれ受賞者の活動の紹介や、武見賞の意義、生存科学研究のあり方や成果等が話し合われ、和やかなうちにも有意義な武見賞授賞式にふさわしい式となった。





バイオサナトロジー学会 総会・フォーラム

11月30日 (木) 霞が関ビル33階東海大学校友会館ホールにおいてバイオサナトロジー学会第４回総会・フォーラムが開催された。

11時より別室で理事会がもたれたが、例年より多くの理事・評議員の出席が得られた。

１時より総会開催、型通りの会長挨拶、年間活動報告・収支決算報告などが行われ、全会一致で承認された。同時に経理上の逼迫状態も報告され協力が要請された。

次いで１時半より師岡副会長の総合司会により、フォーラムが開催された。

第１席は山折哲雄先生による「生死の今日」の予定であったが山折先生が１週間前に急病で倒れられたため、急きょ県立滋賀大学学長日高敏隆先生にお願いしたところ快諾され、演題もそのままにピンチヒッターをお受け頂いた。

日高先生は紹介するまでもないが、コンラート・ローレンツを日本に紹介し、そしてまた日本の動物行動学のパイオニアでもある。動物の行動は種の保全を全うするため、遺伝子によって支配されているというローレンツの説が一時大勢を占めたが、その後「子殺し」の事実が次々に観察されるに及んで、種の保全目的という説明に矛盾がおこり、むしろ個体の子孫を残すための行動としてプログラムされているという説が紹介された。その点において生物はすべて利己的行動をとることについて、いくつかの実例をあげて解説され、

死もまた子孫繁栄のためのプログラムであることを強調され、人間と動物の比較論にまで言及された。

第2席は卜部常任理事より「阪神大震災に見る自然と文明」というテーマで、46年間神戸市東灘区に居住した者として内部からの立場で報道とは違った形の訴えや問題提起がなされた。30分のビデオが上映されたが、我が街東灘区の9カ月に及ぶ、面と時間の変化をテーマとして造られていた。その後バイオエシックスの見地から自然現象のすべては、生物生命に恵みをもたらすものである。人間以外の自然生物が生き生きとしている実例をあげ、自然災害ではなく災害を受けたのは反自然文明を構築した人為災害であることを強調した。次に、広範囲の街が喪失していくという予想だにしなかった現地の人の悲哀感を訴えた。最後に個々の人々の悲劇、それが人間の性であることの悲劇をいかにサポートしていくか、息の長い今後の問題である。また神戸からのメッセージとして現地の都市強化対策よりむしろ他都市の強化対策の方がはるかに重要な問題であるというメッセージを強調した。

第3席は東京からいち早く駆けつけられたインターナショナル・メディカル・クロッシング・オフィス院長の堂園凉子先生のボランティア体験をまじえ、会長の司会で4人の鼎談が行われた。今後のボランティアは何をなすべきかが最大のテーマとなったが、結局結論は心の癒しではないかと会長が結論づけられた。

当日は100人近い参会者があり、熱気のこもったフォーラムを終えることができた。

会員寄贈図書

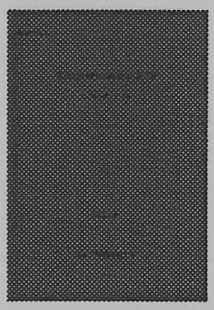
医学統計学の活用

John C. Bailar III, Fredrick Mosteller 編

津谷喜一郎・折笠秀樹 監訳

サイエンティスト社

平成7年10月発行



医療経済の構造分析（3）

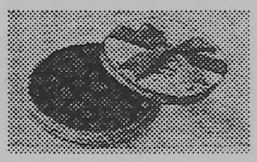
江見康一 編

帝京大学経済研究所

平成7年8月発行

研究所日報

11月13日（月）21世紀の産業活動のあり方研究会

11月28日（火）編集打ち合わせ会

12月8日（金）常務理事会